

SUPPLEMENT TO GENES GENET.SYST. (2014) 89(3)

June 2014

GSJ コミュニケーションズ

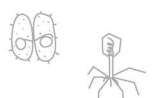
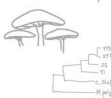
PROCEEDINGS OF THE SOCIETY

GENETICS SOCIETY OF JAPAN (GSJ)

◆創立1920年◆

日本遺伝学会

<http://gsj3.jp>

	目 次	頁
	日本遺伝学会第87回大会のご案内	3
	お知らせ	3
	惜別 近藤宗平先生のご逝去を悼む 武部 啓	4
	総会次第	6
	1) 会員数	6
	2) 2014年度役員名簿	7
	3) 2013年度決算報告書（単年度）	7
	4) 2014年度中間報告（2014年 6月30日現在）	8
	5) 2015年度予算案	9
	6) 2014年度日本遺伝学会木原賞・奨励賞	9
	7) 協力委員会	9
	8) 学会推薦学術賞・研究助成の年間スケジュール	10
	9) 2015・2016年度会長・評議員選挙結果	11
	10) 開催地一覧	12
	長浜大会の様子	13
	ナイトゼミナールの報告	14
	日本遺伝学会第86回大会総会議事録	18
	2014年度日本遺伝学会第1回幹事会・評議員会議事録	19
	2014年度日本遺伝学会編集委員・編集顧問合同会議議事概要	21
	2014年度日本遺伝学会木原賞候補者推薦書	24
	2014年度日本遺伝学会奨励賞候補者推薦書	25
	第15回遺伝学談話会報告	27
	本会記事	
	会員異動	28

日本遺伝学会 第87回大会のご案内

日 時	2015年 9 月23日(水)～25日(金)
場 所	東北大学川内キャンパス
大会委員長	西尾 剛 (東北大学大学院農学研究科 教授)

皆様のご参加をスタッフ一同、心よりお待ちしております。

お知らせ

中村 千春会員 (神戸大学名誉教授) が
平成26年度兵庫県科学賞を
受賞されました。

https://web.pref.hyogo.lg.jp/ac13/ac13_000000009.html



惜 別

近藤宗平先生のご逝去を悼む

近畿大学原子力研究所 武部 啓

私が近藤宗平先生を知ったのは、私が最初のアメリカ留学を終える直前だった。当時放射線研究では世界一の業績をあげていた、オークリッジ国立研究所を訪ね、最初に生物学の部長だったホレンダー博士にお会いした。一番先に聞かれたのはソーハイ・コンドーを知っているか、であった。私は近藤という姓は日本ではよくある姓だが、ソーハイという名前は知らない、と答えた。ところが各研究室を回っていると、すべての研究室でコンドーを知っているか、と聞かれた。ボン・



ボーシュテル博士からは、お前日本へ帰って何を研究したいか、と聞かれ、放射線生物学と答えた。そんなものこの研究所で長年研究していて日本でできるはずがないが、もしコンドーと一緒に何かできるかもしれない、と言った。(これは後に近藤先生から伺ったら、そんなことを言うのはボーシュテルだろう、と言われた)

その直後、日本へ帰って東大の私の修士課程の先生だった田中信徳先生に伺ったら、三島の遺伝研におられた近藤先生、とわかった。田中先生は東大に放射線生物学の講座ができるので近藤先生を招こうと提案したが、京大出身のため候補にならなかった、と言われた。田中先生は典型的な植物学者であったが、当時放射線生物学を理解していた第一人者であった。

まもなく東大である研究会が開かれ、当時は外国から帰ると新しい話題が聞けるかもしれない、とのことで私も呼ばれてアメリカでの研究成果の話をした。ところが座長の2人の先生

(阪大と東大の教授)は、武部の講演は今日の主題と無関係な内容なので討論はしない、と追いつ返された。すごすごと座席に着こうとした私

にちょっと来てくれと話しかけた方があった。廊下へ出たら、私は近藤だと名乗られた。先生がオークリッジで有名な近藤先生ですか。それが近藤先生との初対面であった。

オークリッジの線量がまちがっていたのを全部直してやったのだから、感謝されるのはあたりまえだ。当時の日本からの留学生は、アメリカで学ぶのが精一杯

でアメリカから感謝されるなんてありえない時期であった。近藤先生が東芝と共同で開発したガラス線量計が役立ったと後で聞いた。それよりもお前の今の話は面白いからもっと聞かせてくれ。

しばらくして、田中先生に呼ばれたら、そこには近藤先生の弟子の女性がおられた。近藤先生が阪大から教授に呼ばれているが、お前が一緒に行く気があるか、とたずねられた。東大で助手になってから1年足らずのことだったと記憶している。私はためらうことなく行きますと即答した。それには私のアメリカでの教訓ともいえる経験があった。私が留学したのはアメリカでも名門のジョンズ・ホプキンス大学であったのに、教授、助教授の全員が他の大学の出身者であった。学科長にたずねたら、アメリカでは他の大学などに呼ばれるのが一人前の学者の証拠であり、そこでさらに業績を上げればよい大学にまねかれる。それが私の人生を変えた、といっても過言ではなく、私は近藤先生が

気に入ってくださったのなら喜んで阪大へ参ります、と答えた。あとで東大では恩知らず（私は一番若い助手だった）とあきれられたと聞いている。

阪大へ行ったら近藤先生は前から約束されていた、オークリッジの今度は宇宙の実験に参加するために1年間留守にすると言われ、私は割り当てられた部屋の掃除やラジオアイソトープ施設の管理などに追われていた。そんなある日、事務の担当者が来て、近藤先生の講義の時間で学生が待っています、と通告された。あわてて教室へ行ってみると満員の学生である。なにを講義したのか覚えていないが、近藤先生に手紙を書いたら（その頃はメールもなかった）毎週講義案を送るからそのとおり講義してくれたらよい、と送られて来たのは、私にはほとんど理解できない難解な講義案であった。しかたなく適当にアレンジしてとにかく1学期の講義を終えたが、年度末になって近藤先生が帰国され、試験をされた。もちろん私の講義ではだれもまともな解答はできないが、近藤先生は諦めたのか、呆れかえられたのかお叱りも受けなかった。

しばらくして私に2度目のアメリカ留学の機会を与えていただいた。今度は英語もなんとかなるので、4編の論文を書き、テキサスのダラスでいかにもアメリカらしい生活を楽しんだ。そんなある日、学会で私にとって衝撃的な発表があった。それは私たちが研究している微生物の修復系と同じことがヒトにもあてはまる。それはゼロダーマという病気のことだ。阪大医学部にいる私にとって、それは驚くべき発見であった。すぐ近藤先生に手紙を書き医師の教室員にその研究をはじめようとする。しかし半年たって帰国してみると、誰も始めていなかった。当時はヒトの細胞を培養するなんて、特殊の技術のように思われていた。ところが近藤先生はそれに挑戦するといわれた。もちろん言い出しっぺの私が全責任を負わされ、有無を言わせず設備もそろえ、血清はアメリカから輸

入した。当時は京大が培養細胞の研究で成果を挙げていて、ヒトの皮膚からとった細胞なんて、培養できませんというのが常識だった。今考えても無謀に近い試みだった。それが当たったのである。

大学紛争が全国に広まっていたが、それが幸いして私は皮膚科の先生と親しくなり、ゼロダーマとは日本語で色素性乾皮症という、というメモをもらったのは阪大の敷地内で他の学部の学生と激しく対立している最中だった。皮膚科ではかなり多数の色素性乾皮症の患者を診察していたが、そのうちの23番目の患者が、それまでの日本および外国での患者とはどうも違う特徴であった。当時はかなり外国との交流もできるようになっていたので、旧知のオランダのボーツマ博士に相談したら、オランダにもこれまでとは違った患者がいるので、一緒に研究しようということになり、ロッテルダムの大学で夏休みに共同で研究したら阪大のがF群、オランダのがG群といずれもあたらしい分類と発表した。私はこの発見で国際的に知られるようになったが、これらはすべて近藤先生のおかげで、植物学と微生物しか知らない私に、よくぞヒトの細胞の研究をさせたか、その驚くべき直感には感謝とか感激とかいいようがない。その後も私が京大放射線生物研究センター、京大医学部、そして京大定年後の近畿大学といずれも近藤先生のご支援のおかげでつとめてきた。公私にわたり、ここまでご支援いただきながら、私から先生にはなにひとつ貢献できなかったことが心残りであった。近藤先生を神様あるいは神さんと呼んだのは、私が転出したあとで阪大助教授になられ、後に京大放射線生物研究センター教授になられた池永満生教授であった。近藤先生は正に私たちが思いつかないアイデアを次々と指示され、それがしばしば当たるのであった。それにおどっているうちに学問がすすむ、そんな先生にお教えいただいた幸せを、改めて思い出しながら追悼の言葉としたい。

日本遺伝学会第86回大会総会

日 時 2014年9月18日（木） 15時15分～16時15分

場 所 長浜バイオ大学命江館2階大講義室①

総会次第

1	大会委員長挨拶	委員長	池村 淑道
2	日本遺伝学会会長挨拶並びに報告	会長	遠藤 隆
3	報告		
a	幹事報告	国内庶務幹事 渉外庶務幹事 会計幹事 編集幹事 企画・集会幹事 将来計画幹事	小林 武彦 岩崎 博史 真木 寿治 館田 英典 遠藤 俊徳 中別府雄作 榊屋 啓志 山本 博章
		男女共同参画推進担当 広報担当, ホームページ編集	篠原 美紀 那須田周平
		遺伝学普及・教育担当 その他	関根 靖彦 池村 淑道
b	学術会議から	学術会議連携会員	岩崎 博史
c	学会賞選考委員会報告	委員長	遠藤 隆
d	選挙管理委員会報告	委員長	太田 邦史
e	生物科学学会連合報告	委員	岩崎 博史
f	その他（2015/2016年度日本遺伝学会会長挨拶）		
4	議事		
a	2013年度決算	会計幹事 会計監査	真木 寿治 松浦 彰
b	2015年度予算案	会計幹事	真木 寿治
c	第88回大会について	企画・集会幹事	遠藤 俊徳
d	その他		
5	次期（第87回）大会委員長挨拶	第87回大会委員長	西尾 剛

1) 会員数（2014年8月1日現在）

普 通 会 員	773 名 (内学生会員 170 名)
外 国 会 員	7 名
機 関 会 員	39 件
賛 助 会 員	2 件
名 誉 会 員	国内 16 名 外国 8 名
計	845 名

2) 2014年度役員名簿

会 長	遠 藤 隆				
評議員					
全国区	五條堀 孝	榎藤 洋一	平野 博之	印南 秀樹	角谷 徹仁
	小林 一三	松田 洋一	松浦 悦子	佐々木裕之	田村浩一郎
北海道地区	金澤 章	鈴木 仁			
東北地区	山本 歩	山元 大輔			
関東地区	荻原 保成	澤村 京一			
東京地区	菱田 卓	高橋 文			
中部地区	深川 竜郎	斎藤 成也			
関西地区	石井浩二郎	高野 敏行			
中国・四国地区	村田 稔	和多田正義			
九州地区	楠見 淳子	仁田坂英二			
幹 事					
国内庶務幹事	小林 武彦				
渉外庶務幹事	岩崎 博史				
会計幹事	真木 寿治				
編集幹事	館田 英典				
企画・集会幹事	遠藤 俊徳	中別府雄作			
将来計画幹事	榊屋 啓志	山本 博章			
男女共同参画推進担当	篠原 美紀				
広報担当，ホームページ編集	那須田周平	関根 靖彦			
遺伝学普及・教育担当	池村 淑道				
会計監査	松浦 彰	野々村賢一			
第86回大会委員長	池村 淑道				

学会賞選考委員会（2014）

委員長	遠藤 隆				
委 員	五條堀 孝	（木原賞のみ）	平野 博之	佐々木裕之	荒木 弘之
	岡田 典弘	城石 俊彦			

研究助成金等推薦調査委員会（2014）

委員長	遠藤 隆				
委 員	五條堀 孝	榎藤 洋一	印南 秀樹	角谷 徹仁	小林 一三
	松浦 悦子	斎藤 成也	佐々木裕之	高野 敏行	田村浩一郎

3) 2013年度決算報告書（単年度）

A 収 入		B 支 出	
(単位 円)		(単位 円)	
摘 要	決 算	摘 要	決 算
1 学 会 費	6,437,000	1 事 業 費	5,774,243
2 賛助会費	100,000	雑誌製作費	4,373,152
3 科学研究費補助金	4,000,000	大会補助費	533,091
4 事業収入	3,640,568	遺伝学談話会補助費	200,000
雑誌売上	1,080,000	大会学生旅費補助	523,000
別刷売上	2,559,638	協力委員会分担金	145,000
利 息	930	2 評議委員会／幹事会費	1,511,269
5 木原基金	400,000	3 事 務 費	2,326,048
6 雑 収 入	136,164	雑誌発送費	407,129
7 そ の 他	372,092	封 筒 代	0
小 計	15,085,824	編集経費	1,028,860
総 計	15,085,824	事務所経費	890,059
		4 学会賞関係費	650,659
		5 選挙関係費	0
		6 謝 金	1,270,270
		7 そ の 他	162,092
		小 計	11,694,581
		8 予 備 費	3,391,243
		総 計	15,085,824

4) 2014年度中間報告 (2014年 6 月30日現在)

A 収 入

(単位千円)

摘 要	(A) 予 算	(B) 1 月～6 月 収入額	(C) 7 月～12月 収入見込額	(B + C) 収入見込額
1 学 会 費	6,950	4,414	2,555	6,969
2 賛助会費	100	0	10	10
3 科学研究費助成金	3,920	0	3,900	3,900
4 事業収入	3,901	1,769	1,659	3,428
雑誌売上	1,300	774	504	1,278
別刷売上	2,600	995	1,154	2,149
利 息	1	0	1	1
5 木原基金	200	0	200	200
6 雑 収 入	100	10	50	60
小 計	15,171	6,193	8,374	14,567
総 計	15,171	6,193	8,374	14,567

B 支 出

(単位千円)

摘 要	(A) 予 算	(B) 1 月～6 月 支出額	(C) 7 月～12月 支出見込額	(B + C) 支出見込額
1 事 業 費	8,220	3,035	3,832	6,867
雑誌製作費	6,000	2,910	2,000	4,910
大会補助費	1,000	0	1,000	1,000
遺伝学談話会補助費	300	50	200	250
大会学生旅費補助費	800	0	587	587
協力委員会分担金	120	75	45	120
2 評議委員会／幹事会費	500	94	406	500
3 事 務 費	4,601	3,247	2,180	5,427
雑誌発送費	560	284	200	484
封 筒 代	220	220	0	220
編集経費	2,820	2,018	1,680	3,698
事務所経費	1,001	725	300	1,025
4 学会賞関係費	550	0	500	500
5 選挙関係費	0	0	0	0
6 謝 金	1,300	623	650	1,273
小 計	15,171	6,999	7,568	14,567
総 計	15,171	6,999	7,568	14,567

5) 2015年度予算案

A 収入の部		(単位千円)
摘 要	予 算	
1 学 会 費	6,900	
2 賛助会費	100	
3 科学研究費補助金	4,000	
4 事業収入	3,501	
雑誌売上	1,500	
別刷売上	2,000	
利 息	1	
5 木原基金	200	
6 雑 収 入	100	
小 計	14,801	
総 計	14,801	

B 支出の部		(単位千円)
摘 要	予 算	
1 事 業 費	7,691	
雑誌製作費	5,471	
大会補助費	1,000	
遺伝学談話会補助費	300	
大会学生旅費補助	800	
協力委員会分担金	120	
2 評議委員会／幹事会費	1,200	
3 事 務 費	4,120	
雑誌発送費	500	
封 筒 代	0	
編集経費	2,820	
事務所経費	800	
4 学会賞関係費	500	
5 選挙関係費	0	
6 謝 金	1,290	
小 計	14,801	
総 計	14,801	

6) 2014年度日本遺伝学会木原賞・奨励賞

- 日本遺伝学会木原賞 角谷 徹仁（国立遺伝学研究所）会員
「植物ゲノム進化と発生制御のエピジェネティック機構の研究」
- 日本遺伝学会奨励賞 長田 直樹（国立遺伝学研究所）会員
「ゲノム情報と進化理論の統合による進化機構の解明」
- 日本遺伝学会奨励賞 愿山（岡本） 郁（京都産業大学 総合生命科学部）会員
「植物の DNA 損傷応答のマスター制御因子 SOG1 の分子遺伝学的研究」

7) 協力委員会

- 同位元素協会委員 蓮沼 仰嗣
- 自然史学会連合委員 山本 博章
- 生物科学学会連合委員 岩崎 博史

8) 学会推薦学術賞・研究助成の年間スケジュール

件 名	助 成 団 体 名	締 切
猿橋賞	女性科学者に明るい未来をの会	2014年11月30日 (日)
沖縄研究奨励賞	(財) 沖縄協会	2014年 9 月30日 (火)
朝日賞	朝日新聞社	2014年 8 月29日 (金)
東レ科学技術賞・研究助成	(財) 東レ科学振興会	2014年10月10日 (金)
内藤記念科学振興賞	内藤記念科学振興財団	2014年10月 1 日 (水)
内藤記念海外学者招へい助成	内藤記念科学振興財団	前期 2014年 6 月 2 日 (月)
		後期 2014年10月 1 日 (水)
木原記念財団学術賞	(財) 木原記念横浜生命科学振興財団	2014年 9 月30日 (火)
井上学術賞	井上科学財団	2014年 9 月20日 (土)
井上研究奨励賞	井上科学財団	2014年 9 月20日 (土)
井上リサーチアワード	井上科学財団	2014年 7 月31日 (木)
持田記念学術賞	(財) 持田記念医学薬学振興財団	2014年 7 月31日 (木)
研究助成金	(財) 持田記念医学薬学振興財団	2014年 6 月16日 (月)
留学補助金	(財) 持田記念医学薬学振興財団	2014年 6 月16日 (月)
基礎科学研究助成	(財) 住友財団	2014年 6 月30日 (月)
環境研究助成	(財) 住友財団	2014年 6 月30日 (月)
山崎貞一賞	材料科学技術振興財団	2014年 4 月30日 (水)
研究助成金	(財) 山田科学振興財団	2014年 2 月28日 (金)
藤原賞	(財) 藤原科学財団	2014年 1 月31日 (金)

各種助成金の募集

学会の推薦を必要とする場合は学会内で選考のため財団の提出締めきりより、通常は1ヶ月早く締め切る。尚、各助成金の詳細については事務局までお問い合わせ下さい。

9) 2015・2016年度会長・評議員選挙結果

会 長 遠藤 隆

次 点 城石 俊彦

評議委員

全 国 区	定数10名							
	小林 武彦	荒木 弘之	岩崎 博史	五條堀 孝	中別府雄作			
	木下 哲	菱田 卓	真木 寿治	倉田 のり	田村浩一郎			
次 点	斎藤 成也	颯田 葉子	松浦 悦子	佐渡 敬	高橋 文			

北海道地区	定数 2 名
	遠藤 俊徳
	黒岩 麻里
次 点	金澤 章

東北地区	定数 2 名
	山元 大輔
	渡辺 正夫
次 点	柏木 明子

関東地区	定数 2 名
	河村 正二
	榊屋 啓志
次 点	阿部 訓也

東京地区	定数 2 名
	松浦 悦子
	田嶋 文生
次 点	高橋 文

中部地区	定数 2 名
	北野 潤
	斎藤 成也
次 点	野澤 昌文

関西地区	定数 2 名
	高野 敏行
	菅澤 薫
次 点	秋山 昌広

中国・四国地区	定数 2 名
	杳掛 和弘
	阿保 達彦
次 点	和多田正義

九州地区	定数 2 名
	楠見 淳子
	一柳 健司
次 点	仁田坂英二

日本遺伝学会選挙管理委員会

太田 邦史（委員長） 松本 緑 北野 潤

	有権者数	投票者数	投票率（％）
会 長	757	157	20.7
評議員全国区	757	142	18.8

10) 開催地一覧

回	年	月	日	会 場	回	年	月	日	会 場
1	1928(昭3)	10月	19日	九州帝国大学農学部	44	1972(昭47)	10月	7～9日	岡山大学理学部・法文学部
2	1929(昭4)	7月	26日	北海道帝国大学農学部	45	1973(昭48)	10月	14～16日	名古屋大学農学部
3	1930(昭5)	10月	31日	東京農事試験場	46	1974(昭49)	9月	10～12日	福祉会館(仙台)
4	1931(昭6)	10月	31日	京都帝国大学・楽友会館	47	1975(昭50)	10月	3～5日	日本大学三島校舎
5	1932(昭7)	10月	14日	名古屋医科大学	48	1976(昭51)	10月	28～30日	日本生命中之島研究所(大阪)
6	1933(昭8)	10月	26日	広島文理科大学 動物学教室	49	1977(昭52)	9月	28～30日	北海道経済センター(札幌)
7	1934(昭9)	12月	21日	台北帝国大学 生物学教室	50	1978(昭53)	10月	8～10日	東京農業大学
8	1935(昭10)	10月	21日	金沢医科大学 法医学教室	51	1979(昭54)	10月	11～13日	京都大学農学部
9	1936(昭11)	10月	16日	岡山医科大学 生理学教室	52	1980(昭55)	10月	6～8日	富山大学教養部
10	1937(昭12)	7月	31日	北海道帝国大学理学部	53	1981(昭56)	10月	12～14日	広島大学総合科学部
11	1938(昭13)	10月	13～15日	九州帝国大学農学部・医学部・九州小麦試験地	54	1982(昭57)	11月	19～21日	九州大学医学部
12	1939(昭14)	10月	14～15日	科学博物館(東京)	55	1983(昭58)	10月	8～10日	東北大学教養部
13	1940(昭15)	8月	27～28日	京城帝国大学医学部	56	1984(昭59)	11月	23～25日	日本大学国際関係学部
14	1941(昭16)	地方談話会大会 (6会場)		(総会予定地は仙台)	57	1985(昭60)	10月	13～15日	神戸大学農学部・理学部・自然科学系
15	1942(昭17)	10月	27～28日	東北帝国大学 農学研究部	58	1986(昭61)	12月	4～7日	名古屋観光ホテル
16	1943(昭18)	10月	20～21日	京都帝国大学・楽友会館	59	1987(昭62)	10月	29～30日	筑波大学生物科学系
17	1944(昭19)	地方談話会大会 (7会場)		(総会予定地は名古屋)	60	1988(昭63)	10月	8～10日	京都大学農学部
18	1946(昭21)	11月	18～19日	静岡高等学校	61	1989(平元)	10月	13～15日	北海道大学学術交流会館
19	1947(昭22)	10月	21～22日	松本高等学校	62	1990(平2)	10月	4～6日	お茶の水女子大学
20	1948(昭23)	10月	23～24日	高野山	63	1991(平3)	10月	16～18日	九州大学箱崎キャンパス
21	1949(昭24)	10月	20～22日	名古屋大学理学部	64	1992(平4)	10月	22～24日	仙台国際センター
22	1950(昭25)	10月	14～16日	東京大学医学部	65	1993(平5)	9月	17～19日	日本大学国際関係学部
23	1951(昭26)	10月	11～12日	広島大学教養部	66	1994(平6)	10月	8～10日	大阪大学医学部講義棟
24	1952(昭27)	10月	8～10日	新潟大学医学部	67	1995(平7)	10月	12～14日	岡山大学一般教育講義
25	1953(昭28)	11月	7～8日	国立遺伝学研究所	68	1996(平8)	10月	3～5日	名古屋・椋山女学園大学
26	1954(昭29)	10月	28～30日	京都大学医学部	69	1997(平9)	11月	1～3日	横浜市立大学瀬戸キャンパス
27	1955(昭30)	10月	16～18日	岡山大学	70	1998(平10)	9月	23～25日	北海道大学学術交流会館
28	1956(昭31)	10月	6～8日	富山市公会堂	71	1999(平11)	9月	24～26日	広島大学理学部・法学部・経済学部
29	1957(昭32)	9月	3～5日	北海道大学農学部	72	2000(平12)	11月	3～5日	京都大学農学部・京都会場会議場
30	1958(昭33)	10月	16～19日	名古屋大学医学部	73	2001(平13)	9月	22～24日	お茶の水女子大学
31	1959(昭34)	11月	4～7日	大阪大学医学部	74	2002(平14)	10月	1～3日	九州大学箱崎キャンパス
32	1960(昭35)	10月30日～ 11月1日		九州大学工学部	75	2003(平15)	9月	24～26日	東北大学川内キャンパス
33	1961(昭36)	9月	1～3日	東北大学川内分校	76	2004(平16)	9月	27～29日	大阪大学コンベンションホール
34	1962(昭37)	10月	17～18日	日本大学文理学部三島校舎	77	2005(平17)	9月	27～29日	国立オリンピック記念青少年総合センター(東京)
35	1963(昭38)	10月	8～10日	東京大学教養学部	78	2006(平18)	9月	25～27日	つくば国際会議場
36	1964(昭39)	10月	18～20日	愛媛大学	79	2007(平19)	9月	19～21日	岡山大学
37	1965(昭40)	10月	18～20日	京都大学医学部・楽友会館	80	2008(平20)	9月	3～5日	名古屋大学
38	1966(昭41)	8月	10～12日	北海道大学教養部	81	2009(平21)	9月	16～18日	信州大学
39	1967(昭42)	10月	9～11日	神戸大学教養部	82	2010(平22)	9月	20～22日	北海道大学高等教育機能開発総合センター
40	1968(昭43)	10月	7～9日	広島大学教養部・政経学部	83	2011(平23)	9月	20～22日	京都大学農学部・農学研究科(吉田キャンパス北部構内)
41	1969(昭44)	10月	10～12日	金沢大学工学部	84	2012(平24)	9月	24～26日	九州大学医学部百年講堂・同窓会館
42	1970(昭45)	10月	5～7日	東京女子大学短期大学部	85	2013(平25)	9月	19～21日	慶應義塾大学日吉キャンパス
43	1971(昭46)	10月	20～22日	九州大学理学部・農学部	86	2014(平26)	9月	17～19日	長浜バイオ大学

●●● 長浜大会の様子 ●●●



第86回大会看板



池村大会委員長



会長挨拶



常協名誉会員



長浜バイオ大学学長



郷大会顧問



Dr. Hana



Dr. Remantas



国際シンポジウム



Dr. Sanjeev



発表の様子



懇親会様子



男女共同ランチョン WS

詳細は学会 HP をご参照ください。 <http://gsj3.jp/taikai/taikai.html>

日本遺伝学会第86回大会 ナイトゼミナールの報告

ナイトゼミナールでアンケートをとりまして、集計しましたので報告させていただきます。

参加人数

全体 115名（うち一般87名学生28名）

分野別

集団進化 34名（うち一般10名学生24名）

エピゲノム 21名（うち一般16名学生5名）

分子遺伝 20名（うち一般16名学生4名）

生命情報 17名（うち一般14名学生3名）

植物 12名（うち一般5名学生5名）

行動発生 11名（うち一般10名学生1名）

ここからアンケート（解答数が少ないのであくまで参考）

遺伝学会員種別 一般30名 学生6名

	初めて	1～3年	4～7年	それ以上
会員経過年数	11名	5名	6名	18名
学会参加回数	13名	9名	13名	10名

【自由コメント】

●大会に関して

2日目午後がムダ、発表を入れた方がよい
会場をまとめて発表を開けるようにしてほしい
学生などは同一会場で集めた方がよい
次年度の大会日程をもっと早く決めてほしい
進化学会と近いのでどちらかを選ばざるを得ないことが多い
若手への旅費援助が有るとよい
要旨集は事前に送らなくてよい
口頭発表ができる点が良い

●遺伝学会に関して

遺伝学／情報学の融合をどうするか、遺伝学会としての方向性を示してほしい
遺伝学会は異分野交流しやすい点が良い
シニアのための学会という印象が有り、敷居が高い
紙の学会誌はいらない（PDF でよい）
学会費が高い
小中学生対象のサイエンスレクチャーや遺伝学実験体験などをボランティアで行うことが有るがこのよう
な子供に対する教育を学会でサポートしてほしい
理科に対する興味を早くから持ってもらうことで未来の学会員が増えるように企業タイアップを考えたら
よいかと思う
若手へのアピールが足りない

●ナイトゼミナールに関して

ナイトゼミナールは今回のように1カ所にしてほしい
（学会から補助が出るのはありがたいが）分野ごとに人数が大きく異なり不公平（今回は一括なので関係ない）
いろいろな人と交流できてよい
ただの飲み会なので何か企画が有ってもよい

ナイトゼミナールレポート（エビゲノム）

エビゲノム分野では、大会1日目に終了したシンポジウムや一般演題の演者も加えて約20名ほどに集まっていただきました。飛び入りで参加された方も多く、活気ある交流会となりました。

エビゲノム研究はとても広い研究分野をカバーするため、実験材料やアプローチが異なる参加者の集まりとなりました。

また、年齢・職位に関係なく、エビジェネティクスの今後について議論が活発に行われました。

エビジェネティクス研究が多様化、複雑化する中、このような機会を通じて短時間ながらも深く交流できたという点でナイトゼミの意義は大きいと感じました。今後もこうした会を持続し広く発信することで、研究の世界の楽しさを宣伝することが、研究レベルの底上げ（と新しい学会員の獲得！）にとって重要かつ必須だと思います。（慶應大 齋藤都暁）



ナイトゼミナール（生命情報）レポート

今回のナイトゼミナール全体のとりまとめと新たに加わった生命情報という分野の世話人をさせていただき、全体では115名の皆様にご参加いただき、大きな地ビールの店だったにも関わらず貸し切りで大いに盛り上がる事ができました。同一会場での開催は新しい試みで、懇親会との違いを出せるか不安も有りましたが、自分の分野をベースとしつつも異分野の研究者との交流も生まれたことは幸いでした。また、学生28名にきていただけたことは、遺伝学の明るい将来を予感させるものでした。生命情報分野のナイトゼミナールは初めての試みでしたが、17名の学生・研究者が集い今後の自分たちの研究方向性や生命情報の遺伝学への果たすべき役割に関して多に議論することができました。これから遺伝学研究において生み出される膨大な生命情報は、データマイニングや様々なソフトウェアを介して量から質への転換がなされと考えられます。ナイトゼミナールにより今後ますます分野内・分野間の交流が促進され遺伝学の振興につながることを期待しています。

（長浜バイオ大学バイオサイエンス学部 小倉 淳）



ナイトゼミレポート 分子遺伝

当日参加も含め総勢20名の方々が集いました。美味しいビールとともに、研究の話はもとより、ラボでの苦労話や、将来の方向性についてなど、それぞれ話に花が咲いていたようです。今回は WS6「NGS を用いた生殖系列の変異解析と集団遺伝学の融合による新しい遺伝学の可能性」からの流れもあり、集団遺伝学の太田朋子先生にもご参加いただきました。若手参加者の方からも「思いがけず太田先生の体験談なども伺うことができとても貴重な時間でした。楽しかったです！」との感想が複数寄せられています。普段はなかなか話ができない方々とも、年齢や分野を問わず、気軽に交流できるのもナイトゼミの醍醐味だと思います。また、今回の全分野合同の企画は異分野間交流の観点からも好評でした。このナイトゼミが研究の進展や学会の発展につながる事を期待しています。(九大 大野みずき)



遺伝学会ナイトゼミナール（発生・行動）後記

私はこの度、初めて遺伝学会大会に参加したのですが、恐れながら発生・行動分野のナイトゼミナールの世話役を務めさせていただきました。不慣れな為、いろいろ不手際がありましたことを、ご参加いただいた方々にまずお詫び申し上げます。それにも関わらず、皆様の御蔭でナイトゼミナールそのものは大変盛り上がりしました。理研バイオリソースセンターの榎屋啓志さんを中心に、発生や行動、会員、非会員を問わず活発なトークが広げられ、研究者間の新しい絆が生まれたように感じました。また、私は両生類遺伝学の新展開を紹介するワークショップをオーガナイズさせていただいたのですが、その中で鳥取大学医学部の林 利憲さんにご紹介いただいたイペリアイモリ（下図）の実験系は、その分子遺伝学の材料としての機動力から大きな話題になりました。Cre-loxP システムを駆使して、心臓再生における細胞の脱分化と再分化に取り組む研究のエレガントさには深い感銘を受けました。かつて両生類は遺伝学と縁の薄いモデル動物と考えられていましたが、近年の高効率トランスジェニック技術の開発や、



TALEN 及び CRISPR-Cas9 システムによるゲノム編集技術の発展によって、数あるモデル動物の中でも、最も遺伝子操作の容易なものへと変わりつつあります。このナイトゼミナールから、生物多様性を見据えた新しい遺伝学の潮流が生まれることが期待されます。

(長浜バイオ大学バイオサイエンス学部 荻野 肇)

集団遺伝ナイトゼミ報告書

集団遺伝ナイトゼミは、当日の飛び入り参加も含め、計34名（内学生10名）の参加となりました。集団遺伝と銘打つものの、実際の研究分野や研究対象は多岐にわたり、和気あいあいとした研究交流の場となりました。参加者の年齢層も幅広く、若手から大御所までと大いに盛り上がりました。また、この日に開催されたワークショップ「新しい性染色体の獲得と進化」の演者が全員参加し、参加者の多くもナイトゼミに流れ込み、ワークショップで消化しきれなかったディスカッションを存分に行うという活気的な場面もありました。今後もこうした交流の場が設けられ、研究者交流や共同研究の発展につながることを期待します。（文責 黒岩麻里）



ナイトゼミリポート 植物

長浜大会ナイトゼミナール、植物分野は予約参加者の6名と飛び込み1名の計7名でスタートしました。ベテラン、中堅から学生と年齢層は様々で、乾杯から程なくして打ち解けた後は、博士課程学生の研究成果、若手教員の野心的で興味深いプロジェクトや、互いのキャリアパスなどについて話し合いました。会場の暖かい雰囲気と他グループからの熱気で、初対面の人達の会話も弾んでくる中、当日参加の方が学生を中心に5人参加して下さり、植物分野はさらに盛り上がりを見せました。特に、若手学生がシニア研究者らに積極的に質問する様は印象的で、この様な会を催す本学会独特の良さを感じました。また、初参加の筆者や学生さんらは、ベテランの先生方から遺伝学会の歴史と熱い想いを聞き、来年から是非参加させて頂ければと皆感じたことと思います。（名古屋大 多田安臣）

日本遺伝学会第86回大会総会議事録

日 時 2014年9月18日(木) 15時15分～16時15分
場 所 長浜バイオ大学命江館2階大講義室①
出席者 遠藤隆会長、幹事他90名

1. 議長選出

議長に白井剛会員(長浜バイオ大学)副議長に大島一彦会員(長浜バイオ大学)が選出された。

2. 池村大会委員長挨拶

3. 遠藤隆日本遺伝学会会長挨拶

4. 報告事項(評議員会議事録参照)

5. 議 事

① 2013年度会計決算について

真木会計幹事から総会資料にもとづき説明がなされた。また、松浦彰会計監査から、6月2日に野々村賢一会計監査とともに国立遺伝学研究所にて会計監査を実施した結果、2013年度の会計は適正に行われている旨の報告があり、それぞれ承認された。

② 2015年度予算案について

真木会計幹事から、総会資料にもとづき説明があり、予算通り承認された。

③ 第88回大会について

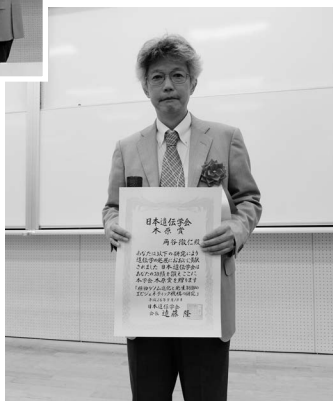
遠藤企画集会幹事から、第88回大会が評議員会において中部地区(三島)で開催することが認められている旨の報告がなされ、同地区での開催が承認された。これを受け同地区幹事小林武彦会員より皆様のご参加を歓迎する旨の挨拶がなされた。

6. その他

品川元会長より GGS の表紙の変更と GGS の完全オンライン化を提案された。

日本遺伝学会木原賞・奨励賞授与式記録

総会終了後、今年度の木原賞受賞者(角谷徹仁会員)および奨励賞受賞者(長田直樹会員、愿山(岡本)郁会員)に遠藤隆会長からそれぞれ賞状と副賞が授与された。授賞式終了後に木原賞、奨励賞受賞講演が行われた。



木原賞の角谷徹仁会員



奨励賞の愿山(岡本)郁会員と長田直樹会員

2014年度日本遺伝学会第1回幹事会・評議員会議事録

日 時：2014年9月18日（木） 14時40分～16時40分

場 所：（幹事会）長浜バイオ大学 命北館1階セミナー室⑤

（評議員会）長浜バイオ大学 命北館4階セミナー室⑦

出席者：（会 長）遠藤 隆

（幹 事）真木寿治、小林武彦、岩崎博史、遠藤俊徳、中別府雄作、山本博章、館田英典、関根靖彦、榊屋啓志、篠原 美、那須田周平、池村淑道（第86回大会委員長）（順不同、敬称略）

（評 議 員）権藤洋一、平野博之、小林一三、松浦悦子、佐々木裕之、田村浩一郎、鈴木 仁、荻原保成、澤村京一、高橋 文、石井浩二郎、和多田正義、村田 稔、楠見淳子、西尾 剛（第87回大会委員長）、山本 雅（オブザーバー）（順不同、敬称略）

1. 会長挨拶（遠藤 隆）

2. 大会委員長挨拶（池村）

第86回大会準備状況（大会の準備についての詳細、大会3日目のWSの一部を公開とし、iGEMの学部生の学会での口頭およびポスター発表について、市民公開講演会の開催など）について報告がなされた。

3. 報 告

3.1 会長（遠藤 隆）

第85回大会以降の物故会員について報告された。

次に会費、投稿料、別刷代、大会参加費のクレジットカード払いの運用を開始したことが報告された。

また、会員減少の対策として新規会員の獲得、若手の育成、定年者の退会の歯止めについて意見が出された。今後、幹事会、評議員会で具体的な対策を検討する。

国際化の推進では台湾との学生交換について説明がなされた。11月に学生を台湾に派遣（台湾側の招聘）する。IGFについては前回から新たな情報がないことより、今後の対応については継続検討課題とする。

3.2 国内庶務幹事（小林）

以下のシンポジウム等の後援、協賛の報告がなされた。

- 第51回アイソトープ・放射線研究発表会
- 甲南大学理工学部 一日科学体験2014
- 日本学術会議公開シンポジウム「初等・中等教育過程における『ヒトの遺伝学』教育の課題と推進方策」

学術賞・研究助成の結果報告がなされた。結果は以下の通り。

- 第10回（平成25年度）日本学術振興会賞および日本学士院学術奨励賞 印南秀樹会員（総研大学）
- 東レ科学研究助成（2013）採択 鈴木崇之会員（東工大）

その他木原学術賞（2013）、東レ学術賞（2013）、山田科学振興財団研究助成（2014）は不採択であった。

また、8月に2015・2016年度会長、評議員選挙を実施したことが報告された。結果は総会資料を参照のこと。

3.3 渉外庶務幹事報告（岩崎）

6/28に第15回遺伝学談話会を学習院大学にて開催したことが報告された。開催の内容についてはGSJ89（4）に掲載する予定。

生物科学学会連合の活動状況として、生科連案内パンフレット2014が発行されたこと、第9回定例会議へ教科書問題検討委員の榊屋幹事と出席したこと、さらに第2回ポストク問題検討委員会へ出席したことが報告された。

また、今年行われる代表選挙について説明がなされたが、遺伝学会からは代表候補者の推薦はしないこととした。投票は10月11日に行われるが、候補者への投票は評議員、幹事からの意見を参考にして最終的に会長が判断する。

3.4 会計幹事報告（真木）

2014年度の会員数、2013年度の収支報告、2014年度の間報告、特別事業基金についての報告がなされた。分野別懇談会を今年も実施するにあたり、遺伝学談話会費の予算をあてることが了承された。

3.5 編集幹事（館田）

GGs論文賞選考経過、平成26年度科研費使途の説明、GGsの編集および発行状況、新編集委員および編集顧問の紹介、科研費による投稿料・別刷代のクレジット払いの実施、英文校閲の充実サポートについて報告された（詳細は編集委員会議事録を参照）。

3.6 企画集会幹事（遠藤俊，中別府）

遠藤俊徳幹事より第86回大会 BP 賞投票について協力の依頼がなされた。第87回大会については、西尾剛次期大会委員長より東北大学にて2015年9/23(水)～9/25(金)に開催し、9/26に市民公開講演会を開催する予定で準備を進めていることが報告がされた。

また、中別府幹事より、2014年3月21日、3月22日に九州大学で開催された国際シンポジウムの報告および今大会で開催される国際シンポジウムの説明がなされた。

3.7 将来計画幹事（樹屋，山本）

遺伝学用語集編集委員会の活動として、現在、原稿回収率が約6割、執筆を了承していただいた分で8割の予定のため、今後未回収の担当変更を検討することが報告された。また、朝日新聞の8月30日(土)朝刊において顕性、潜性の問題にも触れていただいたことが報告された。

教科書問題検討委員会については第1回会議へ出席し、現行の学習指導要領の概要および各学会での取り組みの現状について説明がなされたこと、また、現行の高校（生物）の教科書の問題点についての説明があり、各学会で教科書用語の評価を進めるにあたっての説明がなされたことが報告された。委員会では今後、用語のゆらぎの検討を行う予定であると報告された。

法人化については今後の社会情勢を見守りながら、対応については来期に実施する方向で検討していく。（会長）

3.8 男女共同参画推進担当幹事（篠原）

遺伝学会全会員における女性比率の推移と傾向について、大会参加時のWEBアンケートの結果について報告された。今後の課題として世話人の性別による選ばれる側の性別にバイアスがかからないようにする対策が必要であること、また一般講演の座長の女性比率が参加者比率にくらべて低いことより、次回以降の大会での要検討事項としてあげられた。次に今大会でのランチョンWSおよび大会参加支援についての説明がなされ、今後、大会参加支援は更に利用しやすい方法について提案された。その他、2013年度の活動報告、および委員の交替の報告がなされた。

3.9 広報担当幹事（関根）

英語版HPの記事の追加、会費納入のクレジットカード利用の導入にともなうHPの改良について報告がなされた。

また、GSJ コミュニケーションズの追悼記事（近藤宗平名誉会員）については、どなたかに執筆を依頼することが報告された。

3.10 遺伝学普及・教育担当幹事（池村）

若手会員の獲得のため、今回、大会へiGEMの学部大学生のオープン参加（一部科研費の利用による）を実施し、4名が入会したと報告された。

3.11 日本学術会議報告（岩崎）

日本学術会議の遺伝学分化会での活動状況が報告された。

3.12 2014年度日本遺伝学会賞選考委員会報告（遠藤 隆）

7月10日に学士会館（東京）にて開催された学会賞選考委員会について報告がなされた。木原賞2件奨励賞5件の応募があり、審議の結果、次の会員を授賞者とした。

木原賞：角谷徹仁会員

奨励賞：長田直樹会員、愿山（岡本）郁会員

4. 協議事項

- 2013年度決算および2015年度予算案は会計幹事報告の際に、審議され了承された。
- 第88回大会開催地は中部地区（遺伝研担当）にお願いすることで了承された。

以上

2014年度日本遺伝学会編集委員・編集顧問合同会議議事概要

開催日時：2014年9月16日（火）16時50分～18時50分

会議場所：長浜バイオ大学 命北館4階セミナー室7

出席者：平野，岩崎，巻，松浦，村田，中別府，西原，颯田，澤村，田島，高橋，田中，寺地，那須田，朝井，
権藤，遠藤，Kodzius，Simkova，Xu，Gallande，舘田（敬称略）

議 題

1. GGS PRIZE について

颯田委員より候補7論文が選ばれた経緯及び各論文の内容の説明があった。審議の結果その中から次の2編を GGS prize 2014として決定した。

Misuzu Nosaka, Akemi Ono, Aiko Ishiwata, Sae Shimizu-Sato, Kiyoe Ishimoto, Yusaku Noda and Yutaka Sato

Expression of the rice microRNA *miR820* is associated with epigenetic modifications at its own locus

Genes Genet. Syst. (2013) 88, pp. 105–112

Arguments supporting this decision were:

“Small RNAs such as microRNAs (miRNAs) or small interfering RNAs (siRNAs) regulate gene expression at the transcriptional and posttranscriptional levels in eukaryotes. In general, the primary miRNA transcripts, *MIRNAs*, are synthesized by RNA polymerase II and processed by DICER to form mature miRNAs. It is well documented how mature miRNAs negatively regulate gene expression; however, the mechanism of transcriptional regulation of *MIRNA* genes is largely unknown. In this paper, the authors showed that the transcription of *MIR820*, the *miR820* precursor in rice, is auto-regulated by its mature product, *miR820*, at the epigenetic level. There are five copies of *MIR820* genes in the rice genome and each of them resides within a CACTA transposable element (TE), with the same position and orientation, suggesting that the five copies were generated as the TE amplified. The primary transcript of *MIR820* is mainly derived from one copy on chromosome 7 (*MIR820b*). The unique epigenetic modifications in *MIR820b*, such as its histone modification and DNA methylation status, were only found around the *miR820*-coding region of this copy. The authors concluded that *MIR820b* transcription depends on the unique epigenetic modifications, which in turn are established by the action of *miR820* in *cis*. This is the first paper suggesting that *miRNA* can act on the transcription of its precursor at the epigenetic level. These findings thus provide a significant insight in the study of miRNA-based gene regulation in plants.”

Yusaku Yasuno, Yoshihiro H. Inoue and Masa-Toshi Yamamoto

Elimination of Y chromosome-bearing spermatids during spermiogenesis in an autosomal *sex-ratio* mutant of *Drosophila simulans*

Genes Genet. Syst. (2013) 88, pp. 113–126

Arguments supporting this decision were:

“Sex ratio distortion is a classic topic in *Drosophila* genetics, and has been investigated extensively in *D. simulans* in the last two decades. The present study dates back to 1990, when K. Saito and the last author isolated the *excess of females* (*exf*) mutation from a Japanese natural population of *D. simulans*. This was long before the worldwide vogue for molecular analysis of sex ratio meiotic drive systems. Especially excellent is the authors' cytological artwork, in which they clearly demonstrated the elimination of Y chromosome-bearing spermatids during spermiogenesis. Although the molecular mechanism turned out to be the previously reported *Dox/Nmy* system, the *exf* mutation was unique, and probably an ancient null allele of the drive-suppressing *Nmy* locus. This paper therefore represents significant progress in the study of *Drosophila* spermatogenesis/spermiogenesis, and will stimulate discussions from the evolutionary viewpoint.”

なお次年度以降の選考法について議論し以下のように進めることにした。

- 1) 6月末までに handling editor および他のメンバー推薦から3段階評価を得る。
- 2) 高評価の数、引用数等をもとに GGS prize editor および WG で数編を選定。
- 3) 7月末までに選定された論文を編集委員・顧問に送付，8月末までに各委員は各自が評価できる論文を選び投票（評価できるもの＋評価）
- 4) 集計後9月の編集委員・顧問合同会議で審議

2. 平成26年度科研費（研究成果公開促進費）

種 目：国際情報発信強化（国際情報発信強化（B））

事業課題名：アジアの遺伝学を主導する学術雑誌を目指した取り組み

交付予定額：平成26年度 3,900,000円 平成27年度 4,000,000円

平成28年度 3,900,000円 平成29年度 4,000,000円

目 標

アジアの遺伝学の主要雑誌となることを目指し、5年間で

(1) GGS 編集委員・顧問の外国人（アジアを中心に）を20人に増員、現在 編集委員10人、編集顧問3人

(2) 投稿数を現在の1.5倍、

とする。

26年度科研費の使途

編集委員会開催に係る旅費	1,000,000
編集委員会開催に係る消耗品費・会議費	120,000
欧文校閲費	980,000
学術刊行物に係る電子化関連経費（ホームページ改善）	0
学術刊行物の印刷代、用紙代、製本代等の出版費	1,700,000
プロモーション活動等に係る経費	100,000

なお外国人編集委員・顧問の招聘に関しては、中別府企画集會幹事が企画を行うことになった。

3. Early Online

論文がアクセプトされてからオンラインで公表されるまでに時間がかかるので Early Online を導入し、JST の早期公開機能を使って英文校正後に原稿を公表する。

4. ホームページの改訂

GGS のホームページをより魅力的にするために、WG（平野委員（WG 長）；高橋委員；中別府委員）を作って改訂の検討を始める。予算は20－30万程度を予定している。

5. Editor roles

編集全般、レビュー、GGS prize 担当 editor 名を明記する。

Managing editor: SAWAMURA, Kyoichi

Reviews editor: IWASAKI, Hiroshi

GGS prize editor: SATTA, Yoko

6. Primer notes

今後マイクロサテライトマーカー（SSR マーカー）開発のみの論文（いわゆる primer notes）は掲載しない。開発に加えて新たな生物学的知見がある場合考慮する。

報告・協議事項

1. 論文発行状況

Volume 88

号	掲載論文数	Review	Full	Short	Other
1	8	4	3	0	1
2	7	1	6	0	0
3	8	3	4	0	1
4	5	0	5	0	0
5	5	1	3	1	0
6	2	1	1	0	大会抄録

Volume 89

号	掲載論文数	Review	Full	Short	Other
1	6	4	0	1	1
2	7	0	4	2	1
3 (予定)	7	2	0	4	1
4					
5					
6					

2. 論文投稿状況（9月8日現在）

	2013. 9. 1 – 2014. 8. 31	2012. 9. 1 – 2013. 8. 31 (参考)
投稿論文数	74	52
採択論文数	26	23
不採択論文数	29	23
校閲中又は 取下げ論文数	19	6
採 択 率	47.3% (26/55)	50% (23/46)

3. 新編集委員

Editors

ASAI, Kei (Bacterial Genetics, Regulation of Gene Expression)

HIRANO, Hiro-Yuki (Developmental Genetics, Plant)

Kodzius, Rimantas (Molecular Biology, Omics)

NASUDA, Shuhei (Plant Cytogenetics)

SIMKOVA, Hana (Plant genomics)

XU, Guoliang (Mammalian Epigenetics)

GALANDE, Sanjeev (Chromatin Biology)

Advisory boards

DOLEZEL, Jaroslav

ENDO, Takashi

GAO, Xiang

GONDO, Yoichi

SEONG, Je Kyung

4. GGS page charge 等の支払い法について

Vol. 89 No. 1 より、投稿料・別刷り代のクレジットカードによる支払いが可能になった。

5. 英文校閲

4月より、Dr. Ian R. L. Smith (Elite Scientific Editing) と全 GGS 掲載予定論文の英文校閲を行う契約を行った。アクセプト後 Dr. Smith に原稿を送って著者とやり取りの後に英文を確定し、フォーマットチェックの後、印刷所に送る。大幅な editing が必要な場合は著者が費用負担する。

2014年度日本遺伝学会木原賞候補者推薦書

推薦者：池村 淑道（長浜バイオ大学 客員教授・名誉教授）
受賞候補者：角谷 徹仁（国立遺伝学研究所 教授）



・略歴 (学歴)

1982年3月 京都大学理学部卒業
4月 同 大学院理学研究科修士課程入学（竹内郁夫教授研究室）
1984年3月 同 修了
4月 同 博士後期課程進学
1987年3月 同 修了（理学博士）

(職歴)

1987年4月 農林水産省農業生物資源研究所 室員
1992年6月 米国 Cold Spring Harbor Lab および Washington 大学に博士研究員として留学（Dr. Eric Richards 研究室）
1994年2月 帰国 農林水産省農業生物資源研究所分子遺伝部遺伝子修飾研究室 主任研究官
2000年4月 国立遺伝学研究所総合遺伝研究系育種遺伝研究部門 助教授
2005年4月 同 教授
2006年4月 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻 教授（兼任）
2010年1月 国立遺伝学研究所総合遺伝研究系・研究主幹

- ・研究題目：(和文) 植物ゲノム進化と発生制御のエピジェネティック機構の研究
(英文) Epigenetic regulation of plant genome evolution and development

・推薦理由

角谷徹仁会員は、植物のエピジェネティクス研究を遺伝学の枠組で進め、この新しい分野の発展に貢献してきたバイオニアであり、日本遺伝学会木原賞にふさわしい候補者として推薦いたします。

シロイヌナズナは、DNA メチル化をとまなう遺伝子抑制に必要な因子が遺伝学的手法で多数同定され、エピジェネティクスが大きな研究分野になっています。角谷会員はポストドクとして米国の Eric Richards 研究室に滞在後、1994年に帰国して以来、DNA 低メチル化で誘発される発生異常を連鎖解析するという独自のアプローチをとりました (PNAS 1996)。私は2000年に彼が国立遺伝学研究所に着任する頃から彼の仕事を知りましたが、特に印象深い点は、着任に係るゼミナールにおいて、現象が興味深く明確であるにも関わらず、それを説明するモデルについては大半の遺伝学研究所のメンバーに理解が困難であり、大きな議論を呼んだことです。新しい研究分野を正に開拓し以下の様に見事に発展させました。

まず DNA 低メチル化で誘発された発生異常のうちの幾つかが、トランスポゾンの挿入変異が原因であることを示しました (Nature 2001, Nature 2009)。これらトランスポゾンは野生型では抑制されておりメチル化を除くと転移します。DNA メチル化がトランスポゾンを抑制することでゲノムの安定化に貢献することを直接示した仕事として数多く引用されています。この低メチル化変異体を用いて同定したトランスポゾンの中には、動原体に特異的に飛び込むもの (Genes Dev 2012)、抗サイレンシング活性を持つもの (EMBO J 2013) など、たいへん興味深い研究素材が含まれていました。

一方、低メチル化で誘発される発生異常のうちの幾つかは遺伝子発現の異常によるものであり、異常が世代を超えてメンデル遺伝するため、連鎖解析により標的遺伝子座が同定できたことになります (Plant J 1997; Mol Cell 2000; Science 2004; EMBO J 2007)。エピジェネティックな表現型がメンデル遺伝するというのは当時は意外な現象で、DNA メチル化の変化がメンデル遺伝することを直接示した結果 (Science 1993; Genetics 1999) と合わせ、その後のこの分野の枠組をつくる重要な発見でした。

その後、連鎖解析で同定したエピソードの一つである *BONSAI* 座のメチル化を指標として、彼と研究室の佐瀬英俊博士は、遺伝子からヘテロクロマチンの目印を除く因子 IBM1 (increase in BONSAI methylation) を同定しました (Science 2008; EMBO J 2009; EMBO J 2010)。ヘテロクロマチンをイントロン内に持つ遺伝子の適切な転写に必要な因子 IBM2 の同定 (Nat Commun 2013) もあわせて、IBM1 経路の重要性がエピジェネティクス分野内で注目されはじめています。

このように角谷会員はエピジェネティクス分野が現在の隆盛を示す以前の1990年代はじめから DNA メチル化の遺伝学研究を開始し、この分野のバイオニアとして独創的な成果をあげ続けてきました。現時点で引用回数が100回を超える論文が15報あり (Google Scholar; うち12報で彼が1st あるいは last author)、比較的研究者数の少ない植物分野の論文としては高い引用度です。

彼は1994年に米国から帰国して以来日本遺伝学会会員であり、2011年からは評議員をつとめています。また、いくつかの年会でエピジェネティクス関連のシンポジウム企画や講演を行ない日本遺伝学会の活性化に貢献しています。国際学会でも、Cold Spring Harbor Symposia on Quantitative Biology (2004, 2012) や Gordon Research Conference (2001, 2003, 2009, 2011) や Keystone meeting (2012) をはじめ、多くのミーティングで招待講演を行っており、国際的にも分野を牽引する科学者として高く評価されています。現在も新しい課題や材料にとりくんでおり、今後の研究の展開も楽しみです。

以上、遺伝学分野におけるこれまでの優れた業績に基づき、日本遺伝学会木原賞候補者として角谷徹仁会員を強く推薦いたします。どうかよろしくお願い申し上げます。

2014年度日本遺伝学会奨励賞候補者推薦書

推薦者：太田 朋子（名誉教授）

受賞候補者：長田 直樹（国立遺伝学研究所 進化遺伝学研究部門 助教）



・略 歴

2002年 3 月	東京大学大学院理学系研究科（人類学講座）博士（理学）取得
2002年 4 月～2003年 2 月	国立感染症研究所 協力研究員
2002年 5 月～2002年12月	東京大学 博士研究員
2003年 3 月～2004年10月	シカゴ大学 リサーチアソシエイト
2005年 4 月～2009年12月	独立行政法人医薬基盤研究所 研究員
2009年 1 月～2009年12月	台湾国立成功大学 兼任助理教授
2010年 1 月～現在	国立遺伝学研究所 進化遺伝学研究部門 助教
2010年 1 月～現在	総合研究大学院大学 助教（兼任）

・遺伝学会における活動歴

2005年より現在まで遺伝学会会員

2007年日本遺伝学会大会ベストペーパー賞

On the correlation between gene expression pattern and selection intensity in the human genome.

・研究題目：（和文）ゲノム情報と進化的理論の統合による進化機構の解明

（英文）Clarification of evolutionary mechanisms by integrating genome data with evolution theory

・推薦理由

進化的考察は哲学的・思索的とみなされてきました。日本遺伝学会では、国立遺伝学研究所の木村資生会員を中心として、集団遺伝学の理論的基盤を数学として研究される水準に高め、1960年代に現れた分子生物学的データに適用することで、進化現象を現代科学の対象にすることに大きく貢献してきました。集団遺伝学の理論は着実な発展を遂げている一方、次世代シーケンサの普及・ビッグデータという流行語に象徴されるように、個体レベルのゲノムデータが入手されるようになり、データの出現という点でも1960年代に匹敵する画期的状況にあります。日本遺伝学会、さらに日本の学術においては、このアドバンテージに立脚し、先達に続き集団遺伝学の理論に基づく分子進化の基礎研究を強力に推進する人材が求められています。

そこで、本学会において当該分野で着実に実績をあげており、今後の大きな成果が期待される若手研究者として、長田直樹会員を推薦します。長田会員は、様々な生物を対象に、大規模なゲノムデータや発現データを用いて、独自の視点から研究を進めています。その特徴は、基礎生物学における重要な進化的課題を周辺分野との関連性の中で位置づけて、集団遺伝学理論の深い理解に基づき、分子生物学実験、情報科学・統計科学的手法を自ら駆使して研究を進めていることにあります。具体的な課題は次の3つに集約できます。

分子進化の原理に関して：ほぼ中立説で想定される弱い自然淘汰と遺伝子間相互作用の研究。核ゲノムとミトコンドリアゲノムの相互作用による「弱有害補完進化による分子進化の加速」の提唱・動物と異なる多細胞システムとしての植物の異質倍数体におけるゲノム進化・種分化とゲノムの分化。

遺伝子発現の進化に関して：表現型よりも遺伝子配列に近い遺伝子発現に注目したハエの発現様式の進化。

ヒトの疾患に関して：霊長類ゲノムの比較からの接近。

2014年度日本遺伝学会奨励賞候補者推薦書

推薦者：真木 寿治（教授）

受賞候補者：愿山（岡本） 郁（日本学術振興会特別研究員（RPD）（京都産業大学 総合生命科学部））



・略 歴

平成7年3月 同志社大学工学部化学工学科卒業
平成9年3月 奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科 分子生物学専攻 修士
平成13年3月 同上 博士課程修了 博士（バイオサイエンス）
平成13年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（九州大学大学院 医学研究科）
平成14年4月 奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科 教務職員
平成16年5月 奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科 助手
平成17年7月 University of California Davis Post Doctoral Fellow (Dr. Anne Britt Lab.)
平成18年7月 日本学術振興会海外特別研究員 (Dr. Anne Britt Lab.)
平成20年8月 奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科 国際リサーチフェロー
この間 出産・育児のため休職（平成23年8月10日～平成23年10月31日）
平成24年4月 京都産業大学 総合生命科学部 特定研究員（PD）（植物分子発生生物学研究室）
平成25年4月 日本学術振興会特別研究員（RPD）（京都産業大学 総合生命科学部）

・遺伝学会における活動歴

平成7年9月に遺伝学会に入会。今日まで会員として、ほぼ毎年、遺伝学会大会に参加し、一般講演あるいはワークショップ、シンポジウムなどで発表している（米国留学中の期間を除く）。第84回大会では Best Papers 賞を受賞している。

・研究題目：（和文）植物の DNA 損傷応答のマスター制御因子 SOG1 の分子遺伝学的研究

（英文）Molecular genetical study of SOG1, a master regulator for DNA damage response in plant

・推薦理由

愿山 郁会員は、植物の DNA 損傷応答機構のマスター制御因子を発見し、植物でのゲノム維持機構の解明に新たな突破口を切り開きました。その業績と若手女性遺伝学者としての資質、将来性の観点から、愿山 郁会員を日本遺伝学会奨励賞の候補者に推薦いたします。

愿山会員が学生会員の時には、大腸菌を用いた自然突然変異発生機構の分子遺伝学的研究により、配列置換変異が DNA 塩基配列と複製フォークおよび転写の方向に強く依存することを明らかにしましたが、そこで培われた遺伝学的な研究の進め方や着想、考察の力を生かして、米国留学ではシロイヌナズナを用いた DNA 修復機構の研究に取り組んでおります。その過程で、DNA 修復機構自体ではなく、DNA 修復機構の制御に重要な DNA 損傷応答機構の解明に研究の軸足を移し、帰国後は独立した研究者として研究を活発に展開しております。

DNA が放射線や化学物質で損傷された場合に、細胞は DNA 損傷を感知して、細胞周期の進行を一時的に停止し、その間に様々な修復機構を働かせて DNA 損傷を取り除いたり、その影響を回避したりします。この生物学のプロセスは DNA 損傷応答機構と呼ばれ、その働きにより細胞内外の多様な要因により常に DNA 損傷を受けているゲノム DNA が正確に維持・伝達されることを保障しています。また、DNA 損傷応答機構のもう一つの働きとして、DNA 損傷が修復不可能なレベルの場合には細胞死を誘導して、異常細胞の出現を防ぐことも知られています。これまで、DNA 損傷応答機構は大腸菌、酵母、動物細胞で活発に研究が進められてきましたが、植物では謎とされてきました。DNA 損傷センサーキナーゼと各種の DNA 修復機構は動物と植物とで良く保存されていますが、その間をつなぐ重要なトランスデューサーである p53 に相当するものが植物では見いだされていなかったからです。

愿山会員は、植物での DNA 修復研究のパイオニアである米国カリフォルニア大学デービス校の Anne Britt 教授の研究室にボスドクとして留学しましたが、その研究室で分離されていたシロイヌナズナの γ 線感受性の抑制変異 sog1-1 の研究に着手し、遺伝学的マッピングに基づく SOG1 遺伝子の同定とクローニングに成功し、SOG1 遺伝子が植物に固有の NAC ドメインを持つ転写因子であることを発見しました。その後の解析から、植物細胞に γ 線を照射した際に誘発される300弱の遺伝子の大部分が SOG1 遺伝子を必要とすること、ATM あるいは ATR のセンサーキナーゼの下流で作用すること、sog1-1 変異個体では染色体異常に起因する LOH 頻度が γ 線照射で大幅に上昇すること、 γ 線照射での細胞死が sog1-1 個体では強く抑制されることを明らかにし、SOG1 が動物の p53 に相当する DNA 損傷応答のマスター制御因子の可能性を提唱しました (PNAS, 2009)。帰国後は、奈良先端科学技術大学院大学の国際リサーチフェローとして独立の研究を進めることになり、SOG1 が分裂が盛んな組織の細胞の核に局在し、DNA 損傷に応じて ATM センサーキナーゼに依存したリン酸化を受けることを明らかにしました。複数のリン酸化部位をアミノ酸置換した場合には DNA 損傷応答が強く損なわれることから、SOG1 がセンサーキナーゼによる活性化を受けて働く DNA 損傷応答のマスター制御因子であることを世界で初めて示すことに成功しています (EMBO Report, 2013)。このことにより、植物では動物と異なった DNA 損傷応答の道筋が明らかになり、植物がどのような下流遺伝子の発現によって DNA 損傷に対応するのかを解明する大きな手がかりが得られたことになります。これらの業績は世界中で高く評価され、Plant-Signaling & Behavior 誌から総説執筆の招待を受けており、同誌の最新号に掲載されています。

以上述べたように、愿山会員は遺伝学的手法で植物の DNA 損傷応答の中心として働く SOG1 の研究で大きな功績をあげておりますが、これからの遺伝学研究を支える若手女性研究者としてもロールモデルとなる人物でもあります。帰国後に結婚して、研究を継続しながら出産、京都に研究の場を移して、学振の RPD として子育てをしながら次のキャリアに向けて研究に邁進しております。

第15回 遺伝学談話会報告

日 時：2014年 6月28日 午後3時～5時

場 所：学習院大学理学部 南7号館101教室

第15回遺伝学談話会は、東京地区評議員の菱田を世話人として、豊島区目白にある学習院大学にて行われました。今回の遺伝学談話会では、“微生物”を研究対象として、様々な生命現象の解明に取り組んでおられる、国立遺伝学研究所の仁木宏典先生と東京工業大学の中戸川仁先生を講師としてお迎えし、最新の研究成果を分かりやすく講演していただきました。

まず初めに、中戸川先生から、「酵母の研究が切り拓くオートファジーの分子メカニズム」と題して、出芽酵母の遺伝学的解析によるオートファジー関連遺伝子（ATG 遺伝子）の発見の経緯から、栄養飢餓に応答してタンパク質やミトコンドリアなどの分解に関与するオートファジーの分子メカニズムについて、非常に丁寧にわかりやすく解説頂きました。さらに、感染症やがん、神経変成疾患などのヒトの病気と関わりの深い、細胞質因子の品質管理や種々のストレス応答にオートファジーが重要な役割を果たしていることや、これらの研究成果の多くが日本発のものであることなどを解説いただきました。酵母の観察から見つけた小さな発見から、ヒトの様々な病気に関わる大きな研究領域に発展する過程は、これぞ研究の醍醐味といった感があり、非常に興味深い内容でした。

次に、仁木先生による「ジャポニカス分裂酵母に学ぶ生き物の多彩な生育能力」と題した講演がありました。研究の世界では、出芽酵母の *Saccharomyces cerevisiae* と分裂酵母の *Schizosaccharomyces pombe* が非常に有名ですが、仁木先生の研究されている *Schizosaccharomyces japonicus* は、80年ほど前に日本のイチゴ畑で発見された分裂酵母で、最近まであまり研究には使われていなかったとのことでした。発表の最初に、野生の酵母に関する様々な知見をご紹介頂き、出芽酵母を研究材料として使用している私も知らないことばかりで、非常に興味深い内容でした。酵母は、単細胞の真核生物として有名ですが、ジャポニカス分裂酵母の特徴は、単細胞型の増殖に加えて、カビのように菌糸になって増殖する点です。仁木先生は、様々な環境刺激によって単細胞増殖から菌糸へと変換する仕組みについて、その分子メカニズムを詳細かつ分かりやすく解説頂きました。また、環境刺激に応答して菌糸が成長していく様子をいくつかのムービーでご紹介され、個々の菌糸がまるで軍隊のように統率された動きを示す様子は大変印象深いものでした。

学習院大学のある目白近辺は、文教地区に指定されており、近隣に多くの国立・私立大学があります。今回の談話会では、学会 HP からの告知の他、近隣の大学へのアナウンスを行った結果、複数の大学の教員、大学院生、学生など、合わせて約50名の参加者がありました。談話会の最後に、今回の感想などについてアンケートを行ったところ、多くの方から「分かりやすく、面白かった」「背景からじっくり聞けて有意義だった」という意見をいただきました。研究の背景からご自身の研究成果まで、余談や基礎的なお話も織り交ぜながら解説していただく談話会スタイルは、遺伝学の面白さを発信する良い機会だと実感しました。（菱田）



◆会 員 異 動◆

新入会・再入会

加 納 純 子	565-0871	大阪府吹田市山田丘3-2 大阪大学・蛋白質研究所・細胞核ネットワーク研究室
米 澤 弘 毅	526-0829	滋賀県長浜市田村町1266 長浜バイオ大学バイオサイエンス学部 コンピュータバイオサイエンス学科
中 川 草	259-1193	神奈川県伊勢原市下糟屋143 東海大学 医学部 基礎医学系 分子生命科学
佐々木 真理子	411-8540	静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所
Lau Quintin		Department of Evolutionary Studies of Biosystems The Graduate University for Advanced Studies, Kamiyamaguchi 1560-35, Hayama 240-0193, Kanagawa, Japan
Mishra Neha	411-8540	静岡県三島市谷田1111 総合研究大学院大学・国立遺伝学研究所・進化遺伝学研究部門
岡 畑 美 咲	658-8501	兵庫県神戸市東灘区岡本8-9-1 甲南大学 理工学部 生物学科 生体調節学研究室
宇 多 美 里	658-0072	兵庫県神戸市東灘区西岡本6-1 甲南大学・理工学部・生物学科・久原研究室
遠 藤 光 義	338-8570	埼玉県さいたま市桜区下大久保255 埼玉大学大学院・理工学研究科 生命科学系専攻 遺伝学研究室
塩 見 太 志	739-8526	広島県東広島市鏡山1-3-1A棟309号室 広島大学大学院理学研究科生物科学専攻発生生物学研究室
奥 村 健 介	630-0192	奈良県生駒市高山町8916番地の5 奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス科 原核生物分子遺伝学研究室
奥 田 陸 美	239-0811	神奈川県横須賀市走水1-10-20 防衛大学校理工学研究科物質工学専攻
梶 谷 卓 也	060-0810	北海道札幌市北区北10条西8丁目 北海道大学大学院理学研究科化学部門生物有機化学研究室
関 由 行	669-1337	兵庫県三田市学園2-1 関西学院大学・理工学部・生命科学科・関研究室
岩 崎 祐 磨	190-0002	東京都八王子市南大沢1-1 首都大学東京・理工学研究科・生命科学専攻・進化遺伝学研究室
桂 木 雄 也	526-0829	滋賀県長浜市田村町1266番地 長浜バイオ大学大学院バイオサイエンス研究科 植物分子環境生理学研究室
佐 藤 行 人	980-8573	仙台市青葉区星陵町2-1 東北メディカル・メガバンク機構 ゲノム解析部門
佐 藤 滋	329-0433	栃木県下野市薬師寺3311-1 自治医科大学・分子病態治療研究センター・細胞生物研究部
榊 原 祐 樹	812-8582	福岡県福岡市東区馬出3-1-1 九州大学生体防御医学研究所 ゲノム機能制御学部門 エピゲノム制御学分野
志 浦 寛 相	305-0074	茨城県つくば市高野台3-1-1 理化学研究所 バイオリソースセンター 疾患ゲノム動態解析技術開発チーム
秋 山 礼 良	192-0397	東京都八王子市南大沢1-1 首都大学東京大学院 理工学研究科 生命科学専攻 進化遺伝学研究室
松 本 悠 貴	411-8540	静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所 系統生物研究センター マウス開発研究室

上 田 奈央子	812-8581	福岡県福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学理学部生物学科広津研究室
神 村 麻 友	526-0829	滋賀県長浜市田村町1266 長浜バイオ大学
杉 野 絵里加	700-0005	岡山県岡山市北区理大町1-1 岡山理科大学理学部動物学科動物遺伝学研究室
西 村 美 起	181-0015	東京都三鷹市大沢3-10-2 国際基督教大学大学院 アーツ・サイエンス研究科 理学専攻 布柴研究室
石 川 昌 和	411-8540	三島市谷田1111 国立遺伝学研究所 遺伝情報分析研究室
千 木 雄 太	812-8582	福岡県福岡市東区馬出3丁目1-1 九州大学生体防御医学研究所エビゲノム制御学分野
川 口 茜	526-0829	滋賀県長浜市田村町1266 長浜バイオ大学
大 石 裕 晃	812-8582	福岡県福岡市東区馬出3-1-1 九州大学 生体防御医学研究所 エビゲノム制御学分野
大 畑 樹 也	431-3192	静岡県浜松市東区半田山1-20-1 浜松医科大学
中 原 良 成	739-8526	広島県東広島市鏡山1-3-1 広島大学大学院理学研究科生物科学専攻発生生物学研究室
中 川 拓 郎	560-0043	大阪府豊中市待兼山町1-1 大阪大学・大学院理学研究科・生物科学専攻・分子遺伝学研究室
中 村 遥	192-0364	東京都八王子市南大沢1-1 首都大学東京・生命科学専攻・進化遺伝学研究室
辻 野 裕 大	603-8555	京都市北区上賀茂本山 京都産業・大学生命科学専攻・河邊研究室
藤 戸 尚 子	240-0115	神奈川県三浦郡葉山町上山口1560-35 総合研究大学院大学
薄 伊 納	603-8555	京都市北区上賀茂本山 京都産業大学・生命科学研究科・生命科学専攻・河邊研究室
武 藤 彰 彦	739-8526	広島県東広島市鏡山1-3-1 広島大学大学院 理学研究科 生物科学専攻 発生生物学研究室
平 井 洋 行	526-0829	滋賀県長浜市田村町1266 長浜バイオ大学大学院バイオサイエンス研究科
北 澤 萌 恵	113-8510	東京都文京区湯島1-5-45 東京医科歯科大学 エビジェネティクス分野
牧 野 能 士	980-8578	仙台市青葉区荒巻字青葉6-3 東北大学大学院生命科学研究科
木 下 ゆかり	658-0072	兵庫県神戸市東灘区西岡本8-1 甲南大学大学院自然科学研究科生物学専攻生体調節学研究室
野 元 美 佳	464-8602	愛知県名古屋市千種区不老町 名古屋大学理学研究科 多田安臣研究室
林 悠一郎	606-8502	京都府京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科生物科学専攻動物学教室 環境応答遺伝子科学研究室
鈴 木 基 生	761-0793	香川県木田郡三木町池戸1750-1 香川大学
齋 藤 都 暁	160-8582	東京都新宿区信濃町35 慶應義塾大学・医学部・分子生物学教室

(連絡先自宅のため不掲載)

新見夕姫, 園田 悟, 高山和也, 渡辺 愛, 佐藤 滯, 川岸祐輝, 岸本藍子, 新井健太, 宇治澤知代, 吉田麻美, 白川文教, 小澤良基, 高橋慶祐, 相原玲子, 林 宏樹, 渡邊奈緒, 亀井優香, 河合 翼, 吉田彩, 辰野久司, 田中直子, 瀧谷仁寿, 辻 真矢, 森本省伍, 植木晃弘, 松村直也, 堀口 理, 西浦 学

Pham Tuan Minh, 上野 勝, 栗山友理子, 田中幹子, 古川祐吾, 小穴秋弓, 高岡榮二, 川嶋彩夏, 黃田保憲, 岩川秀和, 岡田 龍, 小川 誠, 岸 努, 中馬いづみ, Nona Abolhassani, 福井智一, 藤井敏男, Sirajuddin Salwa Abdullah, Zhang Jing, Gyawali Yadav Prasad, 赤木一考, 阿部布由人, 有賀大輔, 飯田高広, 池田美央, 石崎誠志, 内山 諒, 梅川 満, 延命大士, 岡本治子, 奥津裕文, 折戸仁志, 加藤耕也, 加藤 翔, 加藤直之, 神谷雄介, 川越大輝, 神戸嘉一, 黒澤恒平, 高本美智, 田村 崇, 田村美帆, 為国愛, 張文娟, 都丸英敏, 中江俊喜, 西田征央, 西永有利, 畑中彬良, 幡中迪彦, 福世真樹, 増田健太, 萬歳明香, 三好健太, 村尾雅司, 村田友輔, 矢口和哉, 山下和宏, 吉田寛輝, 米田詩織, 若林道香, 渡部 桂, 渡邊理恵, 渡部 大, 西原 潔, 梅森十三, 佐藤行人, 鈴木 (小林) 由紀, 炭谷めぐみ, 谷本弘一, 俵元麻貴, 佐々木江理子, 相井城太郎, 小林悟志, 三上哲夫, 鎌田直子, 斎藤 (田中) くれあ, 布目三夫, 本間道夫, 浅見崇比呂, 堀 雅明, 小川紹文, SZMIDT, ALFRED EDWARD E. Alam Mohammad Shafiquel, 田頭紀和, 星山大介, 升方久夫, 松寄健一郎, 尾崎清明, 黒木陽子, 花田耕介, 大谷徹郎

寄贈図書・交換図書

科学	Vol. 84	No. 6-11	(2014)
統計数理	Vol. 62	No. 1, 2	(2014)
CHINESE QINGHAI JOURNAL OF ANIMAL AND VETERINARY SCIENCES	Vol. 44	No. 1-4	(2014)
ChineseJournal of APPLIED & ENVIRONMENTAL BIOLOGY	Vol. 20	No. 2, 3	(2014)
JOURNAL OF CHINA-JAPAN FRIENDSHIP HOSPITAL	Vol. 28	No. 2, 3	(2014)
Advances in Manufacturing	Vol. 2	No. 1, 2	(2014)
ChineseJournal of nature	Vol. 36	No. 1-3	(2014)

(鈴木真有美)

日本遺伝学会会則

- 第1条 本会は日本遺伝学会と称する。
- 第2条 本会は遺伝に関する研究を奨め、その知識の普及を計ることを目的とする。
- 第3条 本会は事務所を静岡県三島市谷田、国立遺伝学研究所内におく。
- 第4条 本会に入会しようとするものは住所、氏名および職業を明記して本会事務所に申し込むこと。
- 第5条 本会会員は普通会員、機関会員、賛助会員および名誉会員とする。毎年普通会員は会費10,000円（ただし在学証明書またはそれに代わるものを提出したとき、あるいは定年退職して常勤職でなくなったことを申し出たときは6,000円）を、機関会員は15,000円を、賛助会員は1口（20,000円）以上を前納すること。会員で会費滞納1年におよぶものは資格を失うものとする。
- 第6条 本会は次の者を総会の決議により名誉会員にすることができる。
本会に功労のあった者、外国の卓越した遺伝学者。
- 第7条 本会は隔月1回遺伝学雑誌を発行して会員に配布する。
- 第8条 本会は毎年1回大会を開く。大会は総会と講演会とに分け、総会では会務の報告、規則の改正、役員の選挙および他の議事を行い講演会では普通会員および名誉会員の研究発表をする。
大会に関する世話は大会委員若干名によって行い、大会委員長は会長が委嘱する。大会は臨時に開くことがある。
- 第9条 本会は各地に談話会をおくことができる。
- 第10条 本会は会長1名、幹事若干名、会計監査2名の役員、および評議員若干名をおく。
1) 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
2) 会長は、評議員が全普通会員の中から選出した複数の候補者から普通会員による直接選挙によって選出される。
3) 評議員は、普通会員による直接選挙で選出される。
4) 幹事は、会長が推薦する候補会員を評議員の過半数が承認することにより選任される。
5) 会計監査は、会長が推薦する候補会員を評議員の過半数が承認することにより選任される。
6) 会長は評議員会を招集し、その議長を務める。幹事は評議員会に出席するものとする。
7) 評議員会は会員を代表して、事業計画、経費の収支、予算・決算、学会誌の発行、大会の開催、その他重要事項について審議し、出席評議員の過半数をもって議決する。
8) 会長ならびに幹事により幹事会を構成し、会長がこれを代表する。
9) 幹事会は、学会の関連事項を論議し評議員会に諮ると共に、会務を執行する。
10) 会計監査は、学会の会計を監査する。
- 第11条 役員および評議員の任期は2カ年とする。会長および評議員は連続三選はできない。
- 第12条 本会の事務年度は暦年による。
- 付則 平成7年10月13日に第5条を改正し、平成8年1月1日から施行する。
- 付則 平成21年9月17日に第5条を改正し、平成22年1月1日から施行する。

Genes & Genetic Systems 第89巻3号（付録） 2014年11月25日発行 非売品 発行者 遠藤 隆 印刷所 レタープレス株式会社 Letterpress Co., Ltd. Japan 〒739-1752 広島市安佐北区上深川町809-5番地 電話 082 (844) 7500 FAX 082 (844) 7800 発行所 日本遺伝学会 Genetics Society of Japan 静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所内	学会事務取扱 〒411-8540 静岡県三島市谷田・国立遺伝学研究所内 日本遺伝学会 http://gsj3.jp (電話・FAX 055-981-6736) (振替口座・00110-7-183404) 加入者名・日本遺伝学会 国内庶務、渉外庶務、会計、企画・集会、将来計画、編集などに関する事務上のお問い合わせは、各担当幹事あてご連絡下さい。 乱丁、落丁はお取替えます。
---	---